

京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を



私たちは、医療福祉施設を中心に設計を行っています。クライアントの想いを叶え、それが社会貢献につながる設計を目指しています。

医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

株式会社 京都建築事務所
代表取締役社長 細見 建司

〒604-8083 京都市中京区三条通柳馬場東入中之町 10 番地
TEL:075-211-7277 FAX:075-211-7270
<http://www.kyoto-archi.co.jp/>



第9回釜ヶ崎のまち短期留学 7月2日(土) 13時～3日(日) 13時

- ◆テーマ 釜ヶ崎をとおしてこれからの社会福祉を考える
- ◆定員 25名(1日目夜の「夜回り」は定員6名・先着順です)
- ◆参加費 10,000円、学生5,000円(夕食代込、宿泊代別)

※宿泊場所は各自でご準備ください。

- 【1日目】水野阿修羅さんのまち歩き／紙芝居劇むすび／「釜ヶ崎での支援の取り組み」ありむら潜さん／「夜回りについて」生田武志さん／夜回り(19時45分～22時※先着順)
- 【2日目】ミニシンポ「若者×地域」～西成の支援のいま～
労働福祉センター、子どもの里、まちづくり委員など

- ◆申込み・問い合わせ◆ 申込みは下記ホームページよりお願いします。
総合社会福祉研究所 TEL06-6779-4894 FAX06-6779-4895
ホームページ：<http://www.sosyaken.jp/> E-mail: mail@sosyaken.jp

第5回「大震災から学ぶ」陸前高田学校 2日目の講演はZOOM参加もできます!

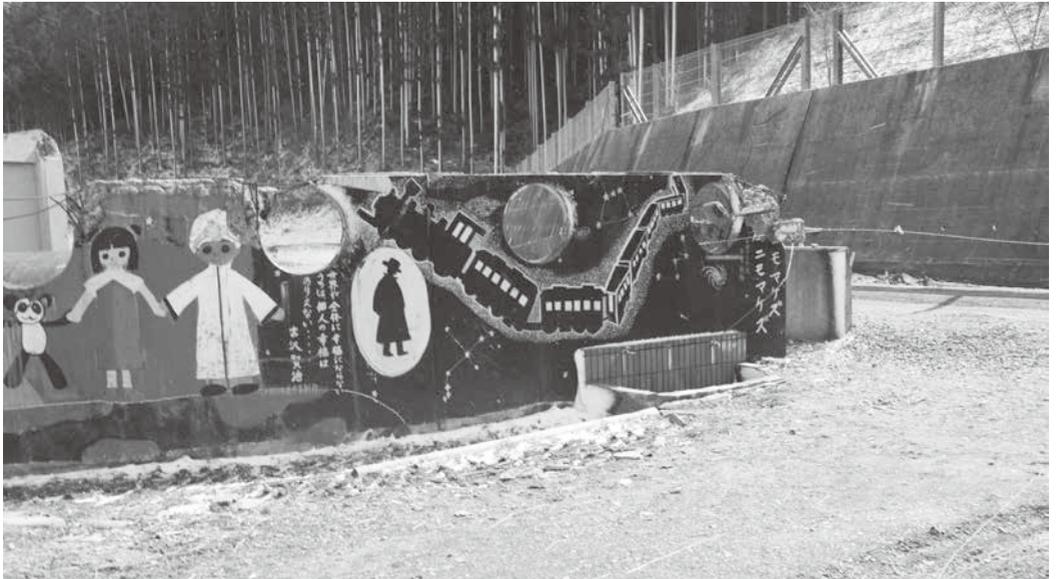
2011年3月11日に発生した東日本大震災では、1万5900人の方が犠牲となり、11年がたった現在でも、2523人の方が行方不明となっています。総合社会福祉研究所では2017年から毎年、現地で学ぶ「陸前高田学校」を開催してきました。昨年はコロナ禍で延期となり、今年の6月10日(金)～12日(日)に第5回目を開催します(参加申し込みは研究所ホームページより)。「学校」としての開催は今回で最後の予定です。4月初旬、開催に向けて打ち合わせにうかがいました。写真は仙台空港に着陸するために宮城県上空を飛行しているところ。震災時、仙台空港には3.02mの津波が押し寄せました。



陸前高田学校2日目に「復興のなかで社会福祉制度は適切かつ柔軟に対応できたか」として報告をいただき、陸前高田市社会福祉協議会の菅野利尚かんのとしなおさん（写真左から3人目）。「復興当時、社会福祉は適切に、柔軟に対応できたのか、いまでも疑問が残っています。なにが大事で、なにが必要だったのかの整理はまだつかない」と話してくださいました。震災後10年間をとおしてなにが変わったのか、なにが変わらなかったのか、ふり返りながら報告させていただきます。



同じく2日目に「経験した事実をありのまま伝えたい」として報告をいただく、語り部の新沼岳志さん(写真中央)。新沼さんは、震災以前から陸前高田のツアーガイドをされていました。報告では、震災当時の状況にくわえて、震災以前の陸前高田のまち並みや歴史、津波によって消失し、いまは“奇跡の一本松”を残すのみとなった高田松原のようすや、松原がだれによって作られたのか、なぜ必要だったのかについて話していただきます。



1日目には陸前高田市内の視察、3日目は陸前高田市立気仙中学校と石巻市立大川小学校の視察を予定しています。写真は2018年に開催した第3回陸前高田学校時の大川小学校。大川小学校では、津波により児童74名、教職員10名が犠牲となり、津波の脅威と教訓を伝えつづけるための震災遺構として遺されています。

今回の陸前高田学校では、2日目の講演（9時半～18時）のみZOOMでの配信も予定し、参加を受け付けています。ぜひ現地の方の声を聞いてください。（写真・文 高倉弘士）

●特集● 現場から考える、ケア労働の質を保障する条件

【座談会】

参加者：上之園康・小俣徹哉・川口遥野・藤原るか・是枝一成 司会：石倉康次 10

介護職の専門性構築に介護人材確保政策が及ぼす影響

石川 由美 25

●トピックス●

第27回社会福祉研究交流集会 in 愛知を開催します 29

【PHOTO】一般社団法人和音ねっと 30

京都市の拙速な「プール制」見直しを許さない！ 中嶋 直子 32

露骨な医療費削減を目的とした2022年診療報酬改定の概要
吉見 賢治 36

「男らしさ」ってなに？——「男社会」釜ヶ崎から考える
水野阿修羅 40

●連載●

WORK WORK——わくワク——

新鮮な自家焙煎豆をお手元に届けたい NPO法人ふぁ～ちえ ぼらりず 46

ミリタンが実現するフランスの福祉
親をすることへの支援 安發 明子 48

かさねあい、はぐくみあう保育実践
やりたい保育が見つけれられる保育園 平尾 恵美 50

夕映えのとき～人生の終え方を支える実践～
「最期までその方らしく」。利用者さん一人ひとりの歩みから教わること
佐藤 礼子 54

JOB&ACTION 全国福祉保育労働組合（15）

2月からの処遇改善事業は、ベースアップによる賃上げを求める 58

私の履歴書 社会福祉経営全国会議（15）
いつもみんなで力を合わせることを大切に、必要なものはみんなで創る！
浅雛みね子 60

阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎（35） 水野阿修羅 62

相談室の窓から
誕生した自我の充実を支えるもの② 青木 道忠 64

育つ風景 子ども目線のメリハリ 清水 玲子 66

ひととしてあたりまえに生きたい
手話言語法の制定を求める 清田 廣 68

映画案内 『名もなき生涯』 吉村 英夫 70

現代の貧困を訪ねて
永田豊隆の『妻はサバイバー』 生田 武志 72

似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート
泣いて笑って銀メダルじゃ！ ラッキー植松 74

ホームレスから日本を見れば ありむら潜 76

花咲け！ 男やもめ 川口モトコ 77

●表紙の絵●
神門やす子



保護者とともに運動をつくってきた歴史を大事にして

大阪保育運動連絡会事務局長 芳村 慶子

私は平日、二匹のメス猫と暮らしています（週末、猫に会うため娘が帰ってくる）。七年前、娘が捨てられていた子猫を拾ってきました。そのときのようすを娘の言葉借りるなら、「母は生ゴミを見るようだった」と。たしかに汚れて目ヤニをつけて「ミャーミャー」と泣く子猫は、私にとって生ゴミでした。当時、私は長く患っている頸椎ヘルニアのため、精神的にもダメージをうけ、暗いトンネルをヨロヨロ歩くような感覚で生活していました。そんな私に猫たちは膝の上でゴロゴロ喉をならし、お風呂からあがると「はやく、一緒に寝よう」と語りかけるように、お布団の上でくりくりした目をむけていました。きつと猫たちに癒されていたのでしよう。ある朝、猫にむかって「おはよう！」と元気に声をかけている自分にびっくり。「暗いトンネルを抜けた」瞬間だったように思います。

現在、私は六五歳定年までの六年間を、次の世代につなぐことを意識して仕事や活動をしています。私たちの世代が感じた悩みや迷い、揺れなど、必要のない苦労はさせたくないとの思いから、これまでの活動の到達を、一緒に仕事をしながら伝えるようにしています。

これまで保育施設での死亡事故にかかわり、民営化、企業参入反対の運動などをするなかで、だれの立場に立てばよいのか、なにを大事に運動をすすめればよいのか、判断に迷うことが多々ありました。そんなとき、「すべての子どもたちが健やかに成長・発達するように」「だれもが安心して子どもを産み育てられるように」「保育を担う人たちが健康で生き生きと働き続けられるように」の大阪保育運動連絡会のスローガンに立ち返ると、おのずと方向性がみえてきたように思います。



よしむら けいこ

大阪市出身。大阪市共同学童保育所の指導員を経て、大阪学童保育連絡協議会事務局、現在大阪保育運動連絡会事務局長。

また、働き方の課題もあります。私たち大衆運動団体の専従者は団交する相手もおらず、労働条件の確立と改善はこれまで一人ひとりの意識と努力でつくってきたように思います。私の働き方をみた娘からはときどき「母の職場はやりがい搾取や」と言われます。いっぽうで、反対に慣れあい、自分たちの勝手なルールで働いてしまう危険性もあると感じています。一人の労働者としての権利も守りながら、地域の運動に寄り添い、民主的な職場を創造していきたいです。

今はかわい猫に癒され接骨院に通いながら、元気に仕事をしています。しかし、保育現場は新型コロナウイルスの影響でいろいろ問題が出てきています。とくにコロナ以前からきびしくなっていた保護者会の活動が、さらに危機的な状態です。コロナ禍のなかでも、保育者の工夫と保護者の協力で、行事やとりくみなど保育を守ってきました。しかし、保育園の送り迎えのときにかわしていた保護者同士のあいさつや雑談の機会がうばわれ、保護者会の開催も見送るなか、つながりが希薄になっています。保育制度が子ども・子育て支援新制度に変わり、保育が福祉からサービス業に変えられようとしています。保護者会がなくなっていけば、さらに保護者は保育サービスを「買う」消費者になってしまいます。

このような問題意識から、今年度は保護者会の調査・研究をしようと考えています。主体的な活動をつくっている保護者会について、保護者同士のつながりが保育や子育てになにをもたらすのかなど明らかにしたいと思っています。大阪の保育運動は、保護者と保育者が力をあわせてつくってきた歴史があります。保育そのもののきびしさをきりひらくためにも、これからも保護者とともに運動をつくっていききたいと思っています。

ケア労働のあり方を社会全体で考えるために

ケア労働者の労働条件の改善を、どうすればケア労働者内の要求にとどまることなく、世論のコンセンサスを得て、社会の問題へと広げていくことができるだろうか。コロナ禍においてさらに福祉現場の実態がきびしくなるなかで、総合社会福祉研究所の理事会や本誌編集企画会議などでも、とりくむべきテーマとして議論されてきました。そこで、六月号と七月号では二回にわたって、異なる視点から「ケア労働の質を支える条件」について考えたいと思います。

まず今号では、高齢・障害・保育、そして社会保障運動の現場の報告から、「ケア労働の質を支える条件」について考えます。感染リスクに対してなんの手当もなく、コロナ禍が人手不足と高齢化に拍車をかけている在宅介護現場。とくに年明けからの第六波で事業継続ができないほどの感染拡大・陽性者対応を迫られた障害現場。そして保育からは、ケア労働者の立場ではなく利用者である保護者の方に登場していただきました。「ケア労働の質を支える条件」について、当事者のケア労働者ではなく、利用者である保護者が前面に立つて問題提起をしてくださったことは、この問題を社会全体に広げていくために、とても意義深いことだと感じます。福祉が商品とされ、サービスを提供する側と購入する側という分断が進められるなかで、保護者の立場から、福祉職を「その人がその人らしくし

あわせに生きるための追求者や、いのちを守る・育てる専門者」と表現していただけたことは、ケア労働者を大きく励ますものではないでしょうか。そして社会保障運動の現場からは、国民の声やくらしの実態から、みんなで社会保障の役割、あり方を考えていく大切さを語っていただきました。

座談会のなかで、ホームヘルパーの藤原のかさんは、「ケアは社会の柱」だと表現してくださいました。第五回オンライン講座の概要を報告しているトピックスでは、水野阿修羅さんが、男性を兵士にするために意図的に子育てなどのケアから遠ざけ、感情に蓋をする「男らしさ」をつくってきた歴史があることを指摘しています。想像力や感情、感受性がゆたかだと、人は殺せないからです。人のいのちを奪う戦争とケアのゆたかさは、どれだけ武力行使を正当化しようとしても、どこまでいっても相容れないということです。勝ち負けではなく、力で相手をねじ伏せるのではなく、お互いを尊重し思いやるケアのゆたかさこそが社会を前進させることを、いまこそケアの現場から発信し、実践し、共感と実感を広げていく大切さをあらためて感じます。

次号では、そもそもなぜケア労働者がこれほど社会のなかで軽視されるのか、その根底にある、社会における「ケア」の位置づけ、いのちへのまなざしについて考えます。理論と歴史の切り口から迫るべく、フェミニズムやケアの研究をされている岡野八代さん（同志社大学）と、障害者福祉や優生思想の研究をされている藤井^{わたる}涉さん（日本福祉大学）の対談です。読者のみなさんといっしょに、ケア労働のあり方を社会全体で考えるための糸口を探したいと思います。

（編集主任）